

東北活性研実践セミナー〈盛岡市〉 「農業ビジネスに新しい風を」 ～農山村女性起業家の取り組みに学ぶ～開催報告

盛岡市において「『農業ビジネスに新しい風を』～農山村女性起業家の取り組みに学ぶ～」と題した、東北活性研実践セミナーを開催し、農山村地域の起業家、行政等から約70名の参加があった。本稿ではその概要を簡単に紹介する。

日時：平成25年12月17日(火) 13:30～16:30

会場：盛岡市観光文化交流センタープラザおでって3階「おでってホール」

13:35～14:15 講演：「夢をカタチに～東北の農山村女性企業家への期待～」

14:20～16:00 パネルディスカッション：「農山村女性パワーがつくりだす“東北の元気”」

講演者プロフィール

・基調講演者、アドバイザー：長谷川史彦氏

(東北大学未来科学技術共同研究センター教授・副センター長)

福島県生まれ。東北大学大学院修了後、研究所助手を経て、新日本製鐵(株)入社。平成13年東北大学未来科学技術共同研究センター助教授。同17年教授。同20年東北大学教授・総長特命主幹。同21年より現職。地域の活力を高めるために、人と人、人と企業、企業と企業、そして人と地域を結ぶスペシャリスト。

パネリスト

・庄司祐子氏(農場レストラン「穂波街道緑のイスキア」代表 / 山形県鶴岡市)

生まれ育った東京から結婚を機に鶴岡に移り住む。家業の農業を事業化するためご主人とともに平成6年(株)ジェイファームを設立後、消費者と直接触れ合う場となる直売所を開設する。その後、自ら生産した米や野菜を提供する場として、平成8年「農場レストラン穂波街道」を開業する。イタリア・イスキア島で修行を積んだピザ職人の息子さんが戻った後、店名を「穂波街道緑のイスキア」とリニューアル。初めて鶴岡に来たときに見た「稲穂の波が揺れる景色」が深く心に刻まれそれが自分の原点と話す。

・松本直子氏(りんご畑の中のカフェ「mi cafe (ミ カフェ)」代表 / 岩手県盛岡市)

農家の生まれではなかったが、果樹専門農家の長男に嫁ぐ。ブルーベリーのつみ取り体験や子供たちの社会科見学などの受け入れをするとともに、平成11年からチャリティーで「りんご畑 de コンサート」を開催し、多くの参加者を集め、りんご畑での活動等を通じ農業を知っていただく取り組みを始める。専業農家を続けていくためにも家業のりんごやブルーベリーなどを使ってお客さまに喜んでもらいたいとの思いから、平成19年カフェ「mi cafe」を開業する。店名の「mi」には、果、見、味、未来、魅力の意味が込められている。

・三浦さき子氏(農漁家レストラン「慶明丸」代表 /宮城県南三陸町)

南三陸町戸倉に生まれ育ち、農業・林業を生業とする家を継ぐ。昭和56年、33歳の時にご主人が他界。その後、戸倉ならではの自分の仕事がしたいと考え、平成11年眼前の海と山の幸を活かした農漁家レストラン「慶明丸」を開業、起業する。店名は、夫の名前の1文字「慶」を使った三浦家の漁船の名前。同23年東日本大震災により店舗、自宅が流出。仮設住宅で暮らすなか、地元の方々が集まることができる場をつくりたいとの強い思いから、今年4月、自宅跡地に「慶明丸」を再建。地元の方々のみならず、視察やボランティアで訪れる方々が気兼ねなく集うことができる場となっている。

・コーディネーター:志賀 秀一氏(株東北地域環境研究室 代表 /宮城県仙台市)

北海道東北開発公庫(現・日本政策投資銀行)入庫。その後、観光施設「山寺風雅の国」常務取締役を経て、平成12年から現職。観光を軸とした地域づくり、まちづくりに取り組んでいる。主な公職は、みやぎ観光創造県民会議座長(宮城県)、大分県竹田市仙台事務所長、日本観光研究学会常務理事など。

1. 基調講演

東北大学未来科学技術共同研究センター教授・副センター長の長谷川史彦氏より基調講演をいただいた。



その理念を基に私たちはセンターの活動を行っています。私たちのお客様は実は学内の研究者の皆さんなのです。研究者の権利、義務を明確にしてセンターとして活動しています。その結果として、最先端の学術研究成果を実用化しています。そして、その活動は産業界でのニーズへ柔軟に対応し、その時々の方針の実現に貢献し非常に良い評価をいただいています。

評価というものは、経済的、お金で還ってきます。多分国内で唯一経済的に自立したセンターではないかと思えます。簡単に説明しますと、文科省からいただいているお金は年間1億円ですが、私たちが独自に生みだしているお金は30億円です。

(1) 確かな理念と使命を持つこと

起業家の方でも研究者でも、「確かな理念と目標」を持って活動することは非常に重要です。東北大学では、「研究第一主義」、「実学尊重」、「門戸開放」を理念に掲げています。「実学尊重」という観点から、未来科学技術共同研究センター(以下センター)は先端科学研究の成果を実社会に適用することを通じて社会に貢献する。という考えに基づき、先端技術を実用化する研究を第一に進めています。

(2) 地域との連携

a. 産学官ラウンドテーブル

センターの重要な機能は情報収集です。そして、情報を使って、将来に向けた企画、立案をしていくことです。これらは会社組織のなかでも重要だと思えますが、大学でも同じです。これは、日常の活動をスムーズに推進するためにはもちろん必要な機能であり、地域という視点では新たな連携体制を創成し、先端的要素技術をどう活用していくかというプロセスとなりま

す。

私どもの地域との連携体制の代表的なものは、「産学官ラウンドテーブル」です。これの創設によって東京エレクトロンなどの半導体、セントラル自動車やさまざまな関連企業の誘致につながっています。このシステムは、宮城県知事、仙台市長、東北大学総長、東北経済連合会会長という地域の産学官の代表が集まる組織です。非常に早い意志決定を行えます。震災後、すぐにこの4者が集まり、その後の指針を決めるとともに政府に対する提言をいち早く作成することができました。

b. 最先端技術の実用化・次世代移動体システムの研究

さて、私たちは最先端の技術を実用化しようとしています。近年、大学の研究はもの凄く細分化されました。世界的な論文を書くとなると、分野は針の先のように尖ってきます。例えば、その頂は富士山やエベレストくらいの高さになる。平成20年以降、学内で、それらを束ねあわせて何かをやろうとしてチーム作りを進めてきました。このことを地域にあてはめて考えると、先端的な要素は非常に分かりにくくなってきましたので、自動車のような形に合わせ技で積み上げ、要素技術を束ねあわせてひとつのものにして、これが東北大学の先端技術だと見せることが次の工夫として出てきたわけです。

平成22年に、東北大学が自動車分野の研究を強化すると発表したところ、世の中の動きにうまくマッチしマスコミにも大きく取り上げられました。これは工学研究科のなかで数々の技術を重ね合わせたわけですが、ロボットと車を融合するというコンセプトで「次世代移動体システム研究会」というものを組織しました。この活動は地域にたいへん喜んでいただきまして、環境と安全に配慮した電気自動車とその運行システムを、仙台市青葉山の新キャンパスにおいて地域と一緒に開発していくということにつながりました。

実は平成27年に仙台市営地下鉄東西線が開

通します。工学部のキャンパスは160ヘクタールもある広大なもので、ここに地下鉄の駅が一つだけできますが、この地下鉄は市営ですので、運行中の仙台市営バスの本数が大幅に減ります。これでは却って不便になるので、地域の企業とともに工学部キャンパスにおける新しい交通システムを提案しようとしています。これは、地下鉄を核とした次世代の公共交通システムです。電気自動車をベースにカーシェアリング等、市民にも公開して先進的なモビリティ技術の体験エリアを創る予定です。

c. 東日本大震災による発展

しかし、開発途中で東日本大震災が発生しました。そこで、研究成果を自分たちだけに使うのではなく、まず真っ先に被災地、沿岸部、新しいまちづくりが必要な地域に提供しようと企画し実行しました。その時、自動車分野だけに、地域と一緒に共同開発しようということになりました。

この活動はマスコミで大きく取り上げられ、その結果、協力者が増えました。平成24年4月に「東北で次世代車研究」の見出しで日本経済新聞の1面トップに取り上げられました。この効果は非常に大きく、全国から我々の研究に協力しようという人たちが沢山名乗りを上げてくれたのです。

この研究はさらに展開します。平成24年12月7日の夕方に大きな地震が発生しました。この時、沿岸地域では東日本大震災が発生した3月11日よりひどい車の渋滞が起きたのです。私たちは震災の経験から大きな地震があった場合には住民の方々は車を捨てて徒歩で避難すると考えていましたが、実際には多くの人々が真っ先に駐車場へ車を取りに走り、大震災の時よりも早く渋滞になってしまいました。そこで、車での避難をしっかり考える必要があるとして新たな発想の研究を行うことになりました。

(3) 地域と大学の共創の場…みやぎ復興パーク 構想

地域と大学が一緒になって活動するためには、実は「場」が必要です。大学が外に出ること。これが必要だということを、私たちは東日本大震災という緊急事態が起きた際に考えました。多賀城市にソニー仙台テクノロジーセンターがあります。ここは津波で2メートル位浸水しました。ソニーの建物は全体で10万㎡位ですが、震災後にそのうちの約4万㎡を地域のために提供いただきました。私たちは「産学官連携ラウンドテーブル」を使い「みやぎ復興パーク」構想として推進し、震災後半年で大型インキュベーション施設の設置が出来ました。

自動車についてお話いたしますと、お借りした7つの建物のうち2つが自動車分野の活動をしています。ここでは沿岸地域の新しいまちづくりのための共同開発、さらには大学の先端的な設備、特に3Dプリンター等、東北にはこれしかないような、新しい東北大学の研究設備を地域の方々に活用いただいています。ここで開発した自動車、小型EV車両、自律走行つまりロボット走行ですね、また交通シミュレーションシステムなどが続々と完成しています。

(4) 皆様へのメッセージ

最後に皆さまへのメッセージとして、新しい価値を地域から提案するということをお話します。

私たちはさまざまな先端的な技術をベースにした取り組みを進めていますが、やはり最終目的は被災地に安全で使いやすい交通システムを提供するということです。また私たち大学の役割、地域への役割ですが、トヨタという大きな会社が地域に拠点を置きましたので、その生産活動へ地域企業に参画していただきたいと思えます。新しい社会システムの中には必ず新しい付加価値、自動車に対する新しい機能の要求が出てきます。それを地域から自動車産業に対して提案していく。つまり、地域は支援されるだ

けではなく、きちんとその恩返しとしての新しい価値観を世の中に提案していくことが非常に大事だと思います。また大学は学生の指導が大事です。元気な若い人たちをどう育てていくのか。それは我々の責務だと思います。

2. パネルディスカッション

三人の女性起業家からそれぞれの事業について紹介後、アドバイザーとコーディネーターを交え、意見交換を行った。

(1) 起業したきっかけや苦労したこと、良かったこと



(庄司) 農業生産法人を夫婦で経営しています。40歳のときに「穂波街道緑のイスキア」というレストランを開業しました。私は22歳になる少し前に、初めて東京から父と母と一緒に

山を越えて庄内平野に入ったのですが、そのときに見たその景色が自分の原点です。特に都会暮らしから嫁いできたので、いつまで経っても農村の原風景は美しいということ表現したいと思い起業しました。私のテーマは農業と食、そして、健康です。現在、市民農園学校を開設し市民のかたがたとの交流をもっと積極的に進めたいと考えています。農業だけではなくお料理もつくり食べて健康になりましょうというものです。これに加えて福祉分野に取り組んでいます。最初に起業したときに、総工費2800万円のレストランを建設しましたが、自分では融資が受けられず苦労しました。また自己資金の200万円もすべて使いきってしまい運転資金がなくなっていました。また起業してから3年目に雇用していた料理人が店をやめ、近くで別な店をオープンしたことなどの苦労がありました。良かったことは自分の店を作ったことで、東京で暮らしていた息子が料理人として帰ってきてくれて後継者となってくれたことです。



(松本) りんご畑のカフェ mi cafe を開業して7年になります。起業したきっかけは、農家を専業でやっていくことがしだいに難しくなってきたということです。私たちは専業で農家を

やっていくことに誇りを持っていましたが、農産物の価格は上がりません。これから続けていくために、規模拡大か、付加価値を付け農産物を有効活用するかの二つを考えました。しかし、規模拡大は、人件費をまかなえるか、また同じ味の農産物ができるかという不安があり、付加価値を付け農産物を有効活用する方向へ進みました。最初は加工場を考えたのですが、りんご畑から見た風景が売りになるのではないかと思いカフェを開業することに決めました。カフェをオープンした土地は農地なので、さまざまな制約があり、その制約をひとつひとつクリアしていくのに、大変な時間と労力がかかりました。こういうことを正攻法でやっていくのは難しいよとも言われましたが、何年かかっても正攻法でと思っておりました。

同じ地区、同じ地域のかたがたに、認められ、「mi cafe があってうれしい、自慢できる」と言われることが一番うれしいです。



(三浦) 私は南三陸町で生まれ育ち、町が大好きでした。食べ物は美味しいし、風光明媚なところでした。

最初は民宿をやるかと思っておりましたが、費用が高額で断念しました。そ

の後生活研究グループに所属して、農業普及委員の先生方と知り合うことができました。平成11年頃には子供も手がかからなくなり、自分のことを考えようということで農業普及センターの先生に、老朽化した作業場で加工品を作ってイベントの際に販売することはできないかと相談しました。そうしましたら、「農漁家

レストランを始めてみたら」と提案がありました。その先生との出会いがあって、自分が何十年と心に秘めていたレストランを1月足らずでオープンできたのです。その時は私もびっくりしました。

東日本大震災で集落全部、何もかも流されてしまいました。以前の店に飾っていた店名の慶明丸の1文字ずつを描いた浮き玉のうちの1つがアラスカで見つかり、いろいろな方にお世話いただいたことで、手元に帰ってきました。私は世界はひとつなんだな、みんなつながっているんだなと思いました。震災のときにボランティアで来てくださった方々とつながりを維持し、仮設住宅で地域の皆さんが集まる場所として慶明丸を再開できたことがとても良かったことです。

(2) 事業展開の上で大事にしていること

(庄司) 私の原点は農業が作り出す景観の美しさです。また私の店はナポリピッツァ協会の正式な認定店で、ナポリと比較して客観的に日本の庄内を見ることもあります。伝統の食文化を何千年も守り抜いている世界の食の都ナポリ。それから私たちの食の都庄内。そして私たちの美しい農村。農村がなかったら都市の人は本当に悲しいと思います。

(松本) 私の畑のところは、幸いなことに若い後継者が続々と出ています。せっかく若い人たちが出ている地域なので、私は自分のカフェにいらしたお客さんに地域で頑張る若い後継者を紹介する場所でありたいと思っています。そうやって頑張っている人が次々と出ている地域だということがお客さんに伝わると、それだけでその産地が元気なんだなと思っていただける。素敵なことじゃないですか。

(三浦) 南三陸に来て休まる、また美味しいものを食べて帰って行く、また私たちが頑張っている姿を見て、私たちもその人たちからいただいた言葉を嬉しく思い、そしてまた来ていただいたときに温かくお迎えする。支援だけでなく、

つながる場所として、私だけでなくまち全体がそういうふうになっていけたらいいなと思っています。

(長谷川) お三方のお話を聞いていて、共通点があるなと思いました。先ほど、理念とか信念とかお話しましたが、やはり原点を見失わないで大事にされておられるなと思いました。また、自分のお客さんが誰かということをはっきり分かっていますね。それは、家族やリピーター、あるいは地域。そこをとにかく大切にしているなと思いました。

(3) これからの取り組みと起業を考えている方へのメッセージ

(庄司) 自分とまわりと地域のためのビジョンを作ればきっと成功すると思います。また、いきなり起業しないで、もし先輩がいたらその方のところに行って、聞いて、学んで、それから起業をしても遅くないです。

(松本) ご自分の地域の魅力は何だろうと、そこを検証することから始められたら良いのだと思います。そこにヒントがあって、それは絶対に見つけた人の勝ち、その人ならではのものが生まれてくると思います。そうすれば必ず事業に結びついてきますし、オンリーワンになると思います。

(三浦) 起業するためにはまず父ちゃんと相談して、うまく巻き込んでね。私は父ちゃんがいなくても、お二人のお話を伺ってやはり協力者、父ちゃんが一番ですね。あとは諦めないで、少しずつ前向きに、一気に飛んでいくのは難しいので少しずつ夢を持って諦めない。いろいろな人たちの話を聞いてやっていくことが大事だと思います。

(長谷川) 皆さんは、とにかく自分たちの生活を大事にしておられるなと思いました。また、このような価値観の個人の集合体が皆さんの理想としておられる地域なのではないかと思いました。そして、各人がそれぞれ大事にしているものこそいわゆる付加価値、つまり、地域におけ

る社会的価値と言えるのだと思います。その社会的価値を経済活動に転換しようとして、つまりお金の換えていくところが今三名の方の活動そのものだと思います。大事なことは決して規模の拡大を求めているわけではない。しかしながら、同様の価値観をもっと多くの方たちが共感すれば、たぶん大きな活動、理想たる地域というものができるとは思いません。ということが期待できそうだなと思いました。



最後に大学のことを言えば、大学の先端技術の使い方を少し工夫していただきたいのです。ぜひ大学の門を叩いて協力を願ってください。

(志賀) 長谷川先生からのお話で、大学との距離感がぐっと縮まったのではないのでしょうか。新しいコラボが生まれることを期待したいと思います。

さて、本日のテーマは「農山村女性パワーがつくりだす『東北の元気、』でした。

私は、以前、瀬戸内寂聴先生にたいへんお世話になっておりまして、天台寺を何度も訪問してお目にかかせていただいております。先生はお会いする度に「私って元気という病気なの」と言って皆の笑いを誘っていました。しかし、先生は「自分が元気でなければ人を元気にすることはできません。」とも仰いました。その通りだと思います。そう考えてみると、地域は元気をつくり、その元気を持続させ、新しい元気へとつないでいくためには、パネリストの皆さんのように自分が住んでいる地域のが好きで、前向きな取り組みを行っている『元気印、』の方々を生み出す環境をつくっていくことが大切なことだと感じた次第です。

なお、本セミナーの詳細については当センターのホームページをご覧ください。

HP アドレス <http://www.kasseiken.jp/>